

## 戦犯扱いで三十一年まで中国

広島県 山田 浩 造

聞き手（木村茂久男）どうも、ご苦勞かけます。お忙しいのに、年末差し迫って。ひとつよろしく。

山田 よろしく。

聞き手 終戦当時から、ひとつラーゲルまで行く期間と、それからラーゲルの中の仕事の状況、それからラーゲルから日本へ復員する時点まで、ひとつよろしくお願いたします。あなたは藤部隊じゃったですね。

山田 藤部隊だったです。藤部隊の編成で向こうへ行ったわけですから、どなたからお聞きになってもほとんどたがわれないと思いますが、それにしても四平街、ヨウゴクリンから出発をして、みんな同じことです。そういう中で、バイカルを越すときに、随分と長く感じたというような印象と、バイカルの辺りで、もう寒いもんだから、薪を随分、部隊で集めた。だれが言うてそうなっ

たか知りませんが、薪を集めて持っていったのを記憶しています。

だから皆さんがお乗りになったような車両の中で、薪とかを入れたら、随分と座る場所、寝る場所が狭まるでしょう。にもかかわらず、あの寒さには何としてもという気持ちで、薪を集めたのを記憶しています。一か月半ぐらいかかったんじゃないかと思えますよ。行ったのがカラカンダの第八分所。ソ連という第二の炭鉱地帯で、しかも囚人の流刑地だといわれる町ですがね。

門のところまで行って二時間ぐらい待たされた。それも寒いんじゃないから、火をたいてくれと思うが、たかさんのですよ。そうして、二時間ぐらいたって、いよいよ門が開いて、入るときに、せっかく大事にして持っていたまき、寒いからと思うたのを、門から中へ入れてくれなかったのを思い出します。まずはそれ。その過程は、いろんな人が言われるだろうから、もう私は省きます。

それから、一つの棟に入って、私はそのときまで、拳銃はなかったですが、軍刀は持っておったんです。二本持っていてよかったから。そいつを出せと言うから、ス

パツと抜いたと思うと、あのマンドリンをブツと向けられたの覚えていますよ。その後、私なんかはそれを取られた。みんなは何も持っていないっておらんのだから、取られるものはなかったんじゃが、その後、私物を全部、一つの大きな建物の中に入れて込んで、その私物を何かの機会に引っ張り出すことがあって、手榴弾が何個も出たということがあります。みんながちゃんと持っていないておるんです。しかし、その中身を調べずに倉庫の中にブチ込んでおるから、その後の過程で出たということもあります。

聞き手 それは、自決しようという考え方ですか。

山田 いや、やつつけてやろうという気持ちもあつたらうし、自決ということもあるかもしれないが、いずれにせよ、武器を持たされん兵隊というものは弱いという立場から、何としても持っていこうという気持ちで、隠し持っていたんでしょう。それが、だれかが持つておるものを見つかつておつたら、それは恐らく射殺されましたね。にもかかわらず、藤部隊の兵隊根性で、そういう気持ちというものがあつたような気がします。

聞き手 それで、軍刀はどうされたんです。

山田 軍刀は二本ともサツと抜いたら、取られました。あそこまでは一応指揮するために持つておらせようという彼らの魂胆ですよ。

聞き手 統率をさすために。

山田 統率をさすために。しかし、要らんようになつたらもう。

ところが、私は何回か、みんなのためにけんかをしては営倉へ入りました。寒い中での営倉というのは耐えられん。地下の倉庫じゃから、もう一晚中歩くか、駆け足をするか、体を動かしておらにゃあ、それこそ、すぐ凍傷にかかるような中で、何回も入りました。

それはみんなのためじゃから、ひとつもいとうことではないが、今も悔いることはありませんが、一番しゃくにさわたつたのは、炭鉱に入らされて、その炭鉱というのは、外は寒くても中はぬくいから、居心地はいいんです。しかし、八時間の炭鉱労働。炭鉱なんていうのは見たこともなきや聞いたこともないようなことですから、初めての炭鉱労働というのはやっぱりきついわね。

その中で、うちの下士官が向こうの技師長というのに殴られたんです、作業のことで。それで腹が立って、十字鍬を逆手に持って、頭にブチ込んだらうと思うたところ、向こうも技師長ともなれば、ロシア人の手前、面子があるでしょう。それで、炭鉱の中で使うランブのサーベルを逆手に持って振り回して、とうとうわしはここへブチ込まれて、というようなこともあって、結局、十年はブチ込みはしませんでした。十年のチョコローマに、囚人にしてやった思い出もあります。

しかし、炭鉱労働というのは、先ほどどなたかの話にあったように、炭鉱労働の条件じゃないんだけど、時として、演劇をやったり、音楽をやらしたり、その部隊が、あの満州関東軍の将校をつるし上げる代表にもなったり、私なんか、中隊の兵隊を連れていっておったせいで、「隊長、襟章を降ろすな。わしらが守るけ、絶対に降ろしてくれな」と言うて、「よし、きた」というんで、ずうっと襟章をつけておりました。

というような部隊で頑張りがちでしたが、二年目ぐらいに、ある日、突然「集まれ」と言うんです。

名指しでタッタタッタと。その連中というのが、情報主任であった者や、憲兵であった者や、巡査さん、そういう連中が庭へ集められた。荷物は要らん、ただ日用品だけ、まあ、洗面ぐらい持ってこいと言うから、何のことも考えずに集まったところが、自動車でサッと連れていかれたのが十九分所。囚人や、取り調べられるというふうな。

そこへ行ったら、今度は苦い目に遭いました、地上の労働でね。炭鉱の労働は一〇〇%、一一一%、一二二%と一一%ずつ上がりで、パーセントが上がるとプレミアがつくんです。まずはパンでしょう、それから砂糖、それから、タバコはなしで、バター、こんなものが特配されるんです。それをみんなで一緒に込みにして、食べてましたね。それと、あの当時のロシア人の生活は、八ルーブルあれば一人が一応生活できる最低賃金、あのお金がね、そういうようなことを聞いておりましたが、私らの中隊のプリンシキ、削岩士なんかは二百ルーブルぐらい取っていましたよ。

それはみんな貯金をして、時々こちらの要求で出させ

て、それを持って私は、そりを持ってバザールへ行つて  
買い込んできた物でもってマガジンをやる。そうする  
と、多く出した者と出さん者との違いはあるんだけど、  
今度これは自分のお金で買うわけなんです。それで、そ  
の買った分を、多く出した者の中へ貯金を入れてやるん  
じゃないんです。この辺はどういうように話し合いをし  
たかよく思い出せんが、私はその首謀者であったことは  
間違いない。バザールまで行つて買うてきたものでマガ  
ジンをやりおつたわけですから。

ですから、今度、舞台をつくつたところで演劇をやつ  
たり、食堂で演劇をやつたり。だからソ連におつても、  
あつちは地上ラゲル、あるいは伐採作業、いろんなと  
ころで非常に空腹だ、空腹だという訴えを聞きました。  
またそのために栄養失調になつたということも聞きました  
が、その時点では、私は空腹だなんていうのを感じた  
ことはほとんどなかった、炭鉱の間は。

寒さについても、そんなに、四十五度くらいるときが  
あつて、列車に乗せられた三人、五人で抱えても抱えら  
れんような材木を、六十人ぐらいが寄つて、それを貨車

から外へ送り出す、こんな作業が、一人が気を許して  
も、それこそ六十人ぐらい一遍につぶされてしまふよう  
な材木を外へ送り出すというような仕事もやりました  
が、しかし、それはたまにであつて、寒さについての脅  
威というのは余り感じなかつた。

そのうちに、もつとぬくうしてやろうと思つて、炭  
から持つて戻つた石炭を、ちょうど私のところに四つぐ  
らいバラックがあつたんですか、そこで中のストーブを  
改造して、たいたところが、とうとう、私らが炭鉱から  
上がつてみたら、煙がボウボウ上がりよるんです、火の  
手がね。ありや、うちの方じゃがのうと思つたら、案の  
定、うちのバラックを全部焼いたんです。私は首になる  
と思つたけど、まあ、なりやせんかった。その原因究明  
については何も触れんかった。というのは、うちの兵隊  
がストーブを改造してやつたことじゃけん。

しかし、そういうこともあつたけれども、それにして  
も炭鉱の仕事というのは、加減をすることもできるし、  
ノルマを上げればプレミアもつくしというふうな点で、  
まずまずでした。

ある日、さつき言うた、突然引っ張り出されたところから連れていかれた十九分所からは、これはひどいものでした。普通暖かいときでも、地上労働では、ノルマー〇〇%というのは難しいように聞きましたが、私らは寒いところへ入りかけのときに行っただでしょう。それで、何せ建築のための基礎掘りをやるんです。八十センチか六十センチの幅で。一メートル八十を掘るんです。

ところが、これは凍土ですよ。これはセメントを固めたよりもっと程度が悪いですよ。もう火をたくのは、つるはしをとんがらして、ちょっと水をつけて焼きを入れる。そういうことのために火はたきますが、それ以外にたかない日はたかない。そういう中で、つるはしを何ぼ焼きを入れても、入れてもすぐに曲がるほどかたいんです。

そうになると、ノルマなんてとても達成できん。

このノルマが達成できなかったら、たちまち食糧に影響します。食べ物を減らされるわけだから。その上に、特に私、並びに私らのところから一緒に行った情報関係等におった者は、皆取り調べを受けました。朝のうちから

出て行って、作業をして、夕方に戻ってくる。それが寒いからとても体がかたくなってしまいうような作業でしょう。加えて今のような凍土を割っての作業だから、全く能率が上がらん、それが食糧に関係する。そういう事情の中で、戻ってきてやれやれと思ったら、「山田」と呼び出しを食らう。今で言う隠しマイクか何かを持っておって、戻ってきたのを見つめるようなもんや。戻って、やれやれ、ちっとでも休もうかと思うときには、もう呼び出し。

そうして行ったら、スタルスキランの中尉じゃ、向この取調官。それから今度こっち側に韓国の通訳さんがおる。次から次へいろんな質問を出しますわな。ところが、自分のことを聞かれるんなら、何ほでも大うそ言うてやりますよ。ところが、事これが、彼らが捕えようとするのは、日本の軍機密を捕えようとしましよう。何をねろうてこんな質問を出しよるのかということが、なかなか捕えられないんですね。

だから、それを何のことはないは、言うてしまえばそうじゃけども、これを本当に上手に逃げながら、しかも

かわそうという、この精神的な苦痛というのは並大抵のものじゃない。そういうのを切り抜け、切り抜けて来たです。しかし、その中で、やっぱり向こうは巧妙だから、敵しいもん来るが優しゅうも来る。上手なんです。

そうなると、やっぱり自分の階級とか職務とか、例えば将校であるかという身分とかいうものを抜きにして、人間、山田という立場で、身をかかわいがろうとする気持ちかやっぱり出るわけ。そのことが、友達を売ったり、軍の機密をどのようにどうなっているか知らんけれども、その結果は我々にはわからんけれども、いずれにせよ、向こうに対して相当のものを提供したり、自分が早く帰るためにいろんなことを言うたり、というふうなものがある。

というようなことが、こっちへ帰って、中隊会でもやったときに、よう来んさらん。同時に、こういうことがあったけ、こんなこんなでというふうなうわさにもなる。その言葉、そういうことを言われる人の、中身の真偽のほどはわからんけれども、しかし、そういうことも、ひょっとして思われるような葛藤の中で、私たちは

日を暮らしました。

そうしておいて、最後にはどういうことになったかという、中共に送られて、帰ってきたのが昭和三十一年の暮れ。しかもその出発に当たって、藤部隊の高級副官から、一か月ほどシベリア沿線の作業に従事したら日本へ帰れるんじやから、皆さん頑張ってくれと言われて行きました。

聞き手 それで三十二年まで。

山田 三十二年まで。期間にして三十一年と言うけれども、あの凍土を割って苦しんだ、あの状況や、取り調べのまないたの上に乗って、いかにして通り抜けようじやなしに、軍事機密等に触れんように、友達に関係せんように、というふうなことで頭を使いながらきた、あの当時のことは、その場におった者じゃなきやわかりません。

聞き手 ありがとうございます。